

箱根路駆けぬけた“S”マーク

“熱い思い”タスキをつなぐー総合17位

1月2、3の両日行われた第81回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)で、2年振り61回目の出場となった専大は、11時間25分14秒(往路=5時間42分34秒、復路=5時間42分40秒)の総合17位でゴールテープを切った。



写真：2区＝奥原佑城(法3)、3区・8区＝校友の高澤さん提供、4区＝日下石聡子(文2)、6区＝宮山友希、7区＝中川泉穂(文1)、9区＝川本麻美(文3)

例年よりハイペースとなった1区。前回も1区を走った彦久保文章(商3・藤沢翔陵高)は、先頭集団に位置したが後半、後退して11位。

“花の2区、に抜擢された座間マボロベネディック(商1・藤沢翔陵高)は、序盤から果敢に走り、一時は5位争いに浮上したが、徐々にペースを崩し16位。3区・平澤幸太(経済2・市立柏高)はラストパートで早大に競り勝ち、15位でタスキをつなぐ。4区・伊深智広(経営3・磐城高)を経て17位でタスキを受けた5区・長谷川淳(経済2・専大松戸高)は、標高差約800mの山登りを走り切り、往路は17位。

復路は3人がエントリー変更。6区・辰巳陽亮(商3・洛南高)が好スタートをきり、7区・高橋良輔(経済2・藤沢翔陵高)から、8区・佐藤彰浩(文2・田村高)にタスキをリレー。拓大をかわし、駅伝主将としてチームを引っ張ってきた9区・吉田智(経営4・専大松戸高)へ。最後の大舞台を力走し、10区・谷口善隆(法4・土岐商高)にその熱い思いを託した。エントリー変更で、急きょアンカーとなった谷口は、明大、関東学連をとらえ、復路は16位。

来年に向け課題も見えた

シード権獲得はならず、今秋の予選会に再び挑むこととなった。

メンバー交替が相次ぎ、厳しい戦いを余儀なくされたが、加藤覚監督が「来年につながる走りが出来た。選手たちにとって大きな自信になったと思う。スタミナ、スピード共にさらに強化したい」と語るように、収穫の多い大会となった。

(橋本 麻未・経済1)

(宮山 友希・文1)

沿道からも熱い応援 オール専修の思いをのせて

第81回箱根駅伝



全学応援団のリードで声高らかに校歌斉唱



スタート前緊張感漂う大手町付近



小田原の応援ポイントに集まってくれた皆様



西川利行名誉教授も箱根湯本に



8区・佐藤を応援する新井勝紘ゼミ



ゴール後に来年の健闘を誓って記念撮影

紙面で紹介したほかにもたくさんの方が沿道でご声援くださいました。ご声援ありがとうございます。





追悼 矢沢正雄さん〈陸上競技部OB〉

1936年(昭11)のベルリン五輪に出場した陸上競技部OBの矢沢正雄さん(昭14経学)が、「箱根」を楽しみにしながら12月11日、心不全のため89歳で亡くなった。

鎌倉学園高から専大へ。戦前の陸上競技部黄金期の中心メンバーで、日本学生対抗選手権で活躍するなど、日本を代表する短距離ランナーだった。全日本学生対抗で出した、200㍎のタイムは今なお、専大陸上競技部記録として残っている。

ベルリン五輪では、200㍎と400㍎リレーに出場。「専大」の名を世間に知らしめた。また、専大が戦前戦後を通じて唯一「箱根」を制した39年(昭14)の第20回大会時の主将でもあった。

97年(平9)4月に発行された旧校友会誌「瑞雲No.17」掲載のインタビューによると、ベルリンへは神戸から船で上海へ、そこからシベリア鉄道で現地入りしたそうだ。ヒトラー大統領と握手したとのエピソードも。帰国後は自宅前が観光名所となるなど一躍有名人となった。

【ニュース専修2005年1月号10面】

専修大学創立125年記念演奏会



12月8日、専修大学創立125年記念演奏会が新宿区の東京オペラシティコンサートホールで開かれた。管弦楽は専修大学フィルハーモニー管弦楽団、指揮は松沼俊彦さん、バイオリン独奏に小林美恵さんを迎え、約1200人の観衆が文化の香り高いひとときを楽しんだ＝写真。

会に先立つ記念セレモニーでは、日高義博学長のあいさつのもとグリークラブ、フェニックスグリークラブの男声合唱と共に校歌を演奏した。

曲目は、モーツァルト歌劇「魔笛」序曲、メンデルスゾーン「バイオリン協奏曲」、チャイコフスキー「交響曲第5番」。

「バイオリン協奏曲」では小林美恵さんの繊細にして優美な独奏と相まって、日ごろの練習の成果を存分に披露。「交響曲第5番」は力強い演奏でオペラシティの会場に負けない響きを作り上げた。アンコールはモーツァルト「ディベルティメントニ長調K.136より2楽章」で、会場の興奮の余韻を包み込んだ。

日高義博学長と学生15人が座談会

若者らしいフレッシュな意見も飛び出す



「学生を基本にした大学づくり」を打ち出す日高義博学長と学生15人との初の座談会が昨年12月に開かれた。「金勉会を作って自主的に勉強している」「第一のショックは、生田キャンパスのきつい坂」「いい授業には先生のオーラを感じる」「文化系サークルにも目を向けて」「24時間機能する大学であってほしい」……など、学生生活全般が

ら授業に取り組む姿勢、大学への注文など若者らしい意見が続出した＝6～7面に記事。

『田尻稻次郎先生立像』

キャンパス探訪 23 アートの旅

本学創立の主要人物4人のうち、終生発展に尽力した相馬永胤が特記されるのは当然だが、他の3人も、それぞれの立場で協力した。田尻稻次郎は米国では経済・財政学を専攻。帰国して本学創立の後、大蔵省（現・財務省）で主税局長、次官を経て会計検査院長、東京市長も務め、子爵。1922年（大正11）には文部省から学制50年記念で、相馬・田尻の2人が教育功労者として表彰されているから、2人の協力は密だった。

田尻の人柄を忍ばせるエピソード。19年（大正8）、長年勤めた会計検査院長の辞職に当たり、職員は惜別の思いを託して高さ50^{センチ}余のブロンズ彫像を贈った。腕組みし、びぜん美髯を蓄えて立つ。それ自体、芸術作品である。当時、既に高名だった朝倉文夫制作と言われて納得。いま、大学史資料課に收藏されている。



【ニュース専修2005年1月号1面】